

『アエネイス』第二巻・第三巻における伝承と予言

岩谷 智

はじめに

『アエネイス』第二巻はトロイアの陥落を主題とする。アエネアスの妻クレウサはトロイアからの脱出の途中、行方不明となり、命を落す。そして亡霊となってアエネアスの前に現われ、アエネアスの目指すべき地は「ヘスペリア」とであると予言する。ところが第三巻になるとアエネアスはこの予言を全く知らないかのように行動する。一般にこれは第三巻と他の巻の間の多くの「矛盾」⁽¹⁾の一つと解釈されている⁽²⁾。

この「矛盾」についてダックワースは悲劇や叙事詩に共通する予言の特質に着目して考察する⁽³⁾。叙事詩や悲劇では登場人物が予言によって未来を予示されているにもかかわらず、それを顧みないかあるいは忘れてしまったかのように振る舞うことがある。これは詩人が読者のサスペンス（持続的緊張感）を高めるために用いる技巧であり、逆に言えば、予言の無視はサスペンスを高めるためのものであれば正当化され、物語の展開の論理性はそのために犠牲になることがある、と解釈する。

予言にはサスペンスを高める効果があるというダックワースの解釈は一般論としては妥当である⁽⁴⁾。しかしウェルギリウスはここで物語の進行を緊迫したものにするだけのために予言を用いているのであろうか。

予言は本来曖昧であると言われる。ウェルギリウスは予言の持つ曖昧さがある目的をもって積極的に利用したのではなかろうか。本稿では伝承と予言の関連に焦点をあててこの問題を検討してみたい。

第一章 伝承におけるアエネアス像

ウェルギリウスがその叙事詩の主人公に選んだアエネアスという人物はそもそも伝承の上ではどのような人物であろうか⁽⁵⁾。

『イリアス』によれば、アエネアスはトロイア軍中、ヘクトルに劣らぬ尊敬を受け(5.467)、神のように敬愛され(11.58)、武勇の点でも抜群であった(13.481ff.)とされる。但し実際の戦いの場面では一度ならず神によって助けられることになる(5.311ff., 20.288ff.)。

同じく『イリアス』でポセイドンはアエネアスによる王権の継承を予言する(20.307f.)。これはゼウスが既にプリアモス家の者たちを憎んでいる(20.306)からとされるが⁽⁶⁾、アエネアス自身もプリアモスに対して恨みを抱いている、とも言われる(13.460f)。またアキレウスはアエネアスが王権に対する望みを持っていると言う(20.178ff)。

さらに王権継承の場所に関しても伝承には様々な説がみられる。ポセイドンの予言の背景には、イリアスの詩人の時代にトロイアを支配していたのがアエネアスの子孫(アエネアダエ)であるという伝承があったと思われる⁽⁷⁾。すなわち、アエネアスは陥落後もトロイアに留まったと考える伝承である。一方アルクティノスの『イリウ・ペルシス』によれば、アエネアスはラオコオンが蛇に殺されたのを凶兆とみなしてトロイアの陥落の前に脱出し、イダ山にこもったとされる⁽⁸⁾。またソポクレスの『ラオコオン』には「アンキセスの命令に従って」イダ山中に逃げのびたという同様の伝承が伝えられている⁽⁹⁾。

これに対して『タブラ・イリアカ』には「アエネアス、一族郎等と共にヘスペリアへ旅立つ」という銘文がみられる⁽¹⁰⁾。但しこの「ヘスペリア」は単に「西方」という意味であろう⁽¹¹⁾。

従って一行のラティウム到着を最初に伝えるのは紀元前5世紀のヘッラニコスと考えてよかろう。ハリカルナッソスのディオニュシオスには、「アエネアスはオデュッセウスとともに（あるいは後に）モロッシイ人の国（エピルス）からイタリアへやって来て、ローマの創始者となった。この名前は同行してきたローメという一人のトロイア女にちなんだものである。ヘッラニコスが述べるところによればこの女は放浪に疲れたがために他の女たちを唆し、彼女たちとともに船に火を放ったのである」⁽¹²⁾という記事がみられる。

但しこの場合アエネアスのラティウム到着はあくまでも放浪の結果であると考えられる⁽¹³⁾。つまり伝承ではアエネアスは最初からイタリア半島を目指したとはされておらず、更に彼の目的地がイタリア半島である必然性も伝承の中には見いだし得ないことに留意しておく必要がある。

またトロイアの滅亡にもかかわらず生き残ったことからアエネアスの裏切りという伝承も登場する⁽¹⁴⁾。紀元前5世紀から4世紀の歴史家クサントスのメネクラテスは、アエネアスはアンテノルとともに裏切ったとする⁽¹⁵⁾。またハリカルナッソスのディオニュシオスは、アエネアスがトロイアの落城の際に勇敢に戦ったと述べながらも、他説として、その時には「偶然」城内にいなかったという説も伝えており⁽¹⁶⁾、更にヘッラニコスの説として、トロイアを放棄するという条件でギリシア軍と講和を結んだ、とも伝えている⁽¹⁷⁾。リウィウスも同様に、アエネアスとアンテノルはギリシア軍によって助命されたと伝える⁽¹⁸⁾。これらは明らかに裏切りを示唆するものである。

裏切り説に対して *pietas* を強調する伝承も存在する。例えば『イリアス』でアエネアスが神々によって命を救われるのは彼の日頃の敬虔の念の故とされる（20.298）。またリュコプロンの『アレクサンドラ』のスコリアによれば、アエネアスはギリシア軍からトロイアを去るにあたって何を希望するかと尋ねられたとき、父親と

トロイアの神像を選んだ⁽¹⁹⁾。またウァロによれば、ギリシア人たちは、最初に父親を選んだアエネアスの孝行の念にうたれて更に選択を許した。するとアエネアスはペナテスを選んだので、再び賞嘆するところとなり、望むもの全てを従えて行くことを許した、とされる⁽²⁰⁾。

このように『アエネイス』以前には、ローマにおいても裏切りと *pietas* の伝承が並立していたのである。

第二章 伝承と予言

こうした様々に伝えられる人物、時には二面性を感じさせるアエネアスという人物を主人公にするにあたって、ウェルギリウスはどのような態度を取ったのであろうか。

一般に伝承に対して詩人が取る態度には三種類あると考えられる。即ち、多くの伝承の中から都合の良いものを採用するものと、逆に都合の悪い伝承は打ち消すか部分的に改変を加えるものと、既存の伝承には従わず新しく物語を創作するものとである。

これらをウェルギリウスは第二巻、第三巻でも使い分ける。以下では落城の際アエネアスの夢枕に現われたヘクトル、行方不明となったクレウサ、クレタ島でのペナテスのそれぞれの予言を比較検討して、伝承と予言の関係について検討したい。

トロイア遠征の十年目、ギリシア軍は巨大な木馬を残し陣営をあとにする。ラオコオンはこれをギリシア軍の策略であると主張するが、シノンの巧みな弁舌とラオコオンを襲った蛇の予兆によって、トロイア軍はこの木馬を城内に引き入れる。その夜木馬に潜んでいたギリシア軍の英雄たちは城の内側から門を開け、引き返して来た本隊を城内に乱入させる。この木馬の奸計によって難攻不落を誇って来たトロイアが陥落する。

この夜ギリシア軍の退却を信じて眠りについたアエネアスの枕元にヘクトルの亡霊が現われて予言する(2.289ff.)。この予言のポイントは次の三点である。

1. 289 トロイアから脱出せよ。
2. 290-292 トロイアの滅亡は不可避。
3. 293-295 ペナテスに新しい祖国を見つけよ。

この予言がアエネアスのトロイア脱出の発端となったのに対し、脱出行を締めくくることがクレウサの予言である。アエネアス一行は陥落するトロイアから脱出し、城外にあるケレスの神殿を目指す。その途中でクレウサだけが行方不明となる(21)。急いで妻を捜しに城内に戻ろうとするアエネアスにクレウサは亡霊となって現われ、予言する(2.776f.)。この予言は次のような内容である。

1. 777b-779 自分の死。
2. 780 -782 放浪を覚悟せよ。
3. 783 -784a 新しい祖国を捜せ。
4. 784b-788 自分の死は神意である。

これら二つの予言を比較してみると一見、内容的にはほとんど違いがないように思われる。つまり新祖国、脱出が共に示唆されており、トロイアの滅亡とクレウサの死には対応関係が認められる。更に、ヘクトルが祖国トロイアの滅亡は人間の力では防ぎ得ないと語るのに対して、クレウサは自分の死は神意によると述べていることにも共通性が見られる。また各々の亡霊の登場の描写及びアエネアスの反応などにも対応する点が見られる。

それではこの二つの予言は単なる繰り返しに過ぎないのであろうか。

ヘクトルは滅亡、脱出、新祖国という三点を提示する。ところがこのうちペナテスに新しい祖国、安住の地を与えるという『アエネイス』全体のテーマ (*Aen.* 1.5-6 *dum condere urbem/ inferretque deos Latio*) は第三巻以降に持ち越されているものの、滅亡と脱出はクレウサの予言の段階では既に完全に認識・受容されていることに注目したい。

ここでこの間の経過を確かめるためにヘクトルの予言からクレウサの予言までの物語の展開を上記三要素のうち、「新祖国」を除く「滅亡」・「脱出」の二つを中心に追ってみることにする⁽²²⁾。

・ 滅亡の認識

ヘクトルは死力を尽くしたがトロイアの滅亡は不可避だと予言の中で語る。しかしアエネアスは戦いで死ぬことこそ美しいと考え、この忠告に耳を傾けない。戦いの場におもむいたアエネアスはパントゥス、プリアムスの場面で徐々に滅亡の現実を知るが、戦いの狂気(*furor*)を失うことはない。この時ウェヌスが現われる⁽²³⁾。この出現は何を意味するのか。

ウェヌスは滅亡の原因を悟らせるために、神々がトロイアを壊滅させる姿をみせる。これによって「祖国にもプリアムスにもこれ以上なすことはない。もしベルガマを力で守ることが出来るならこの私の右手でも守りとおせただろうが」(2.291-292)というヘクトルの予言が裏付けられることとなる。

予言というものは本来曖昧なものである。しかしその中には必ず真実が隠されている。詩人は予言の真実を徐々に解き明かしていく過程で、最初、予言を否定し、盲目的に死へと突き進んでいく英雄が徐々に神意に従うようになる姿を描く。こうして詩人は巧妙に伝承を改変し、窮地にあって、すぐに逃げ出すような臆病者でも卑怯者でもなく、ましてや裏切者でなどない主人公、ローマの国民的英雄

雄に相応しいアエネアス、という人物像を作り上げていくのである。

・脱出の受容

アエネアスの脳裏にはこの時点までトロイアから脱出する気持ちはなかった。ところがウェヌスはトロイア陥落が神意であることを示した後、更に、アンキセスとともにトロイアから脱出せよという。父の面影をプリアムスの死の場面で思い浮かべていたアエネアスはウェヌスの言葉に従い父のもとに駆けつけることになる。

ここで物語の焦点は滅亡認識から脱出の受容に移る。

ところがアンキセスは老年を理由にトロイア脱出を拒む。父の説得に失敗したアエネアスは再び復讐の狂気に駆りたてられて戦いに向かおうとするが、その時、「不思議な予兆」が息子ユルスの頭に現われる。「触れても害のない炎」がユルスの髪の毛や顚を舐め動くのを見てアンキセスは思い直し、ユピテルにこの予兆を更に確実なものにするように懇願する。するとユピテルは雷を下し、流れ星がイダの山に落ちる(24)。

この二段階の予兆によってアンキセスは脱出することに同意しアエネアスに従う。この時点で始めてアエネアスは脱出の第一歩を踏み出すのである。

このようにトロイア滅亡の原因が認識された過程と同じく、脱出行が受容されるには、否定的な言動が不可欠なのであり、それを通じて初めてヘクトルの予言の真意が認識されるという物語の構造になっているといえる。

ここまでのヘクトルの予言からクレウサの予言までの経過である。つまりヘクトルは脱出・滅亡・新祖国を予言する。この三つの要素のうち脱出と滅亡に関して、まず主人公あるいはその父によって否定的な行動が取られる。ところが滅亡の原因が認識され、脱出行が

受容されるのはこの否定的な行動の後である。すなわち物語は

「予言による新展開の提示－否定的行動－認識・受容」
という構造になっているのである。

従ってヘクトルの予言とクレウサの予言は表面的には発展はないようにみられるものの、その主人公による認識の度合いには大きな違いがあると考えられる。二つの予言の間に読者は、主人公が予言に反する行動にでるのを目の当たりにしてサスペンスを感じる。これはダックワースの解釈の通りである。しかしさらに、詩人は独自のアエネアス像を描くための場としてこの否定的行動を利用していると考えられる。

ここで伝承との関係をまとめてみよう。

ウェルギリウスはアエネアスがヘクトルから王権にも相当するペナテスを委ねられたとする。これは『アエネイス』以前の伝承にみられたアエネアスの王権に対する野望説を否定し、王権継承の正当性を示唆するものである。またトロイア滅亡の真相の認識と、二重の予兆による脱出の受容という構図は、アエネアスの裏切説を否定するものとなっている。

この間の状況を図式化すると次のようになろう。

Hkt.	戦い	Pan.	Pri.	Ven.	Anch.	予兆	Creu.
滅亡	否定→確認1→確認2→真相認識						死
	↓						
脱出	……………(父)……父→否定→受容						放浪
	↓						
祖国	…(ペナテス)……………ペナテス						目的地

(Hkt.ヘクトル；Pan.パントゥス；Pri.プリアモス；Ven.ウェヌス
Anch.アンキセス；Creu.クレウサ)

・新祖国の提示

アエネアスは第二巻でトロイアの滅亡も脱出も神意であることを知った。さてヘクトルの予言のうちの最後の一点、新しい祖国に関してはどのように認識することになるのであろうか。ここではクレウサの予言とペナテスの予言の比較検討が必要である。

アエネアスはトロイアの聖物とペナテスを携えた父を背負い、息子の手を引き脱出する。ここで新祖国建設という新たな展開が生まれる。

但しここではまずペナテスを携えて生き延びることに重点が置かれておりそれを「どこに」安置するかという問題は未だ表面化していない⁽²⁵⁾。

さて『アエネイス』第三巻についてビュヒナーは、オデュッセウスには帰国という明確な目標があったのに対してアエネアスの目的地は明確ではない、そして第三巻の構成の軸は目的地の段階的解明である、と考える⁽²⁶⁾。つまりアエネアスの放浪は予言で示された地が「どこであるか」を知るためのものであるとみなすのである。果たしてそうであろうか。

まずクレウサの予言のうち新祖国に関する箇所(2.780-784)を重点的に検討の対象としよう。この4行余りにはいくつかのキーワードが含まれており、それは次の4要素(放浪・目的地・状況・将来)に分類出来よう。

1. exsilia, uastum aequor	780	放浪
2. Hesperia, Lydius Thybris	781-782	目的地
3. arua inter opima uirum	781-782	状況
4. res laetae (regnum, regia coniunx)	783	将来

ここで特に2.の地名について注目したい。「リュディアの」という形容詞は一般にエトルリア人がリュディアから渡って来たという伝承を背景にする⁽²⁷⁾。ということはエトルリアのティベリス河を目指せという予言がトロイア滅亡の夜になされているわけである。一般の伝承では一行のイタリア到着は単に放浪の結果であるに過ぎないのに対し、最初から運命的に予言されていたとすることは、「アエネアスの子孫」たるローマ人にとって大きな意味を持つ伝承の改変であったと思われる⁽²⁸⁾。

次にこの予言と第三巻のペナテスの予言(3.154-171)とを比較してみよう。この予言の中にも同じく4要素(放浪・目的地・状況・将来)が認められる。

1. tumidum aequor	157	放浪
2. uenturos in astra nepotes	158	将来
3. Hesperiam, Italiam, Corythum, Ausonias	163-171	目的地
4. potens armis atque ubere glabrae	164	状況

ここで見落としてならないキーワードは Corythus という具体的な地名である。クレウサの予言の「リュディアの」とは「エトルリアの」と同義であったが、このコリュトゥスもエトルリアの一都市である⁽²⁹⁾。クレウサはエトルリアに起源を持つ地を求めよと予言し、ペナテスも同様の予言をする。この二つの予言は重複なのか。

ここでクレウサの予言からペナテスの予言までの経過を追うことにしよう。アエネアス一行はアンタンドロスの港から船出し、トラキアに植民を開始するが、ポリュドルスの予兆によってここが穢れた土地であることを悟る。そこで一行は目的地を知るためにデロス島に赴き、アポロの神託を求める。ここで「母なる地を求めよ」との神託を受け、アンキセスはテウクルスの祖国クレタこそが目的地であると判断する。しかしクレタで植民を開始した彼らに悪疫が襲

うと、ペナテスがアエネアスの夢枕に現われ、ダルダヌスの祖国エトルリアのコリュトゥスを目指せと告げるわけである⁽³⁰⁾。

クレウサは目指す地はエトルリアだと語った。しかしその根拠を認識しない一行は、放浪を繰り返す。しかしその間に彼らの目的地が「母なる地」であり、さらに「ダルダヌスの祖国」であることが段階的に示される。ここで注意しておかねばならぬのは、段階的に示されるのはあくまでもエトルリアを目指せという予言の根拠であって、ビュヒナーの主張するような目的地そのものではないことである。

これによってアエネアスによる「新祖国の建設」はある意味では「ダルダヌスの帰国」でもあることになる。これはウェルギリウスのアエネアス伝説に対する新しい解釈であると考えられる。

新祖国の建設＝帰国という認識は物語の展開において大きな意味を持つ。つまり第四巻のディドの誘惑、第五巻の船火事が共に、アエネアスにとってローマ建設の使命を放棄しかねないような危機となるのは、それらがそれぞれの地での建国を用意しているからと考えられる。ディドはカルタゴでの共同の建国を提案する。船火事の場面ではシシリアでの建国という選択も可能であった。それ故にアエネアスは苦悩するのである。そこに登場するのがメルクリウスであり、アンキセスの亡霊なのであるが、彼らが共通して力説するのは、「祖国」でこそ未来の栄光が約束されているということなのである。それ故にアエネアスは危機を脱することが出来るのである。

むすび

詩人は伝承に様々に伝えられる人物を主人公にするにあたってその否定的な面は極力打ち消し、長所は強調する。そのために詩人は予言に内包される曖昧性を積極的に利用する。

第二巻と第三巻には予言による「新展開の提示－その否定－展開

の終結」という共通するパターンが存在する。つまり詩人は予言を用いて滅亡、脱出、新祖国という三つの事柄を主人公に予示するが、予言の持つ曖昧さ故に主人公は即座に従わず、それに反する行動をとる。そして否定的な行動を通じて初めて主人公が予言のメッセージを認識し受容するものとして描く。その過程で詩人は独自のアエネアス像を作り上げる。

まず第一に、アエネアスは自ら欲して王権を継承するのではなく、ヘクトルによって委ねられるとする。これはウェルギリウスの創作であろう。さらに戦いにおもむく姿を描いてアエネアスが臆病者ではなく、また裏切り者として陥落するトロイアから脱出したのではないことを示す。ここではウェルギリウスは多くの裏切りの伝承を否定している考えられる。

またクレウサの予言ではアエネアスは最初からイタリアを目的地としていたとする。また更にそこが目的地である理由も「ダルダヌスの祖国」の故とペナテスの予言が明らかにする。これによってアエネアスの放浪が単にペナテスを守るためだけではなく、「帰国」＝「新祖国ローマの建設」という使命を達成するための試練として位置付けられることになる。これらは伝承には存在せず、詩人が創作したと考えられる。

更に父及びペナテスと共に脱出する姿はアエネアスの *pietas* を伝える伝承に従ったものであり、ローマの精神風土によく適合していると考えられる。

このようにウェルギリウスが一見重複するかと思われる三つの予言を用いた意図は、予言の本来的な曖昧さを利用して、伝承に伝わるアエネアス像をローマの国民叙事詩の主人公に相応しいものに作り上げることにあったと思われる。

注

(1) 第三巻と他の巻の間の矛盾の例として食卓の予兆を第三巻ではケラエノが予言しているのに対して第七巻ではアンキセスが予言したことになっていること、アエネアスの航海の期間についても第一巻と第五巻では7年とされているが（この記述も互に矛盾していると考えられる）、第三巻の内容からはそれほど長いとは考えられないことなどが指摘されている。cf. R.D. Williams, P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Tertius, Oxford 1962, introd. 19-23.

(2) クレウサの予言の矛盾に関して研究者間に多くの意見の相違がみられる。まず提唱されたのが詩人が最終的な校定の際に修正したであろうと推測する考え方である。ウェルギリウスは現在伝わる『アエネイス』になお三年間の校定を予定していたとされているが（Vergilii Vita Donatiana）、これを踏まえての解釈である。なおこの考え方をする場合矛盾の原因として各巻の制作順が問題となって来る。しかし第三巻の制作を後期とする説と初期とする説が対立している。後期とする説をとるのは R. Heinze, Virgils Epische Technik, Leipzig und Berlin 1915 (rep. Stuttgart 1976), 86ff., B. Otis, Virgil-A study in civilized poetry, Oxford 1963, 417ff. 初期とする説は A. Cartault, L'Art de Virgile dans l'Eneide, Paris, 1926 264ff., Williams, op.cit. introd. 22., F. Klingner, Virgil, Bucolica, Georgica, Aeneis, Zuerich und Stuttgart 1967. また K. Buechner は P. Vergilius Maro, Stuttgart 1959. (=RE) 343, 58ff. では比較的初期のものとみなしていたが Deutsche Literaturzeitung 86, 1965, 983（筆者未見。cf. Klingner, op.cit., 436）では後期であると考えを変えている。また推測される修正の方法についてもクレウサの予言を曖昧にするか、第三巻のなかで神の追認によってこの予言は始めて理解されると強調する（Williams, op.cit., introd. 20）などが考えられている。但し Klingner, op.

cit.420は第三巻の ' Ungewissheit ' をなくすような修正は詩の効果からいっても行なうべきではないと述べている。更にクレウサの予言の中のヘスペリアは単に「西の地」を意味するだけであり明確な意味を持たないとする説をとるのが E.Adelaide Hahn, *On an Alleged Inconsistency in the Aeneid*, CW 13, 1920., M. B. Ogle, *On Some Theories Concerning the Composition of the Aeneid*, AJP 45, 1924, 261-275., 及び Catharine Saunders, *Vergil's Primitive Italy*, New York 1930, 194ff. (= CQ.19, 1925, 85ff.). また Hahn は Aeneis 2.781 and 3 again, CW 14, 1921, 122-126ではアエネアスは一般にアンキセス以外の人間（あるいはその霊）の予言は顧みないともみる。その他種々のこの矛盾に関する論文については R. B. Lloyd, *Aeneid III: A New Approach*, AJP 78, 1957, 133-151. 参照のこと。

(3) G.E. Duckworth, *Suspence in Ancient Epic - an Explanation of Aeneid III*, TAPA 62, 1931, 124-140.

(4) 予言と詩の統一性に関しては C. H. Moore, *Prophecy in Ancient Epic*, HSCP 32, 1921, 99-175参照。

(5) 主に考古学的見地からのアエネアス像については G. K. Galinsky, *Aeneas, Sicily and Rome*, Princeton 1969, 第一章 Pius Aeneas 参照のこと。なおこのガリンスキによるアエネアス像に対する批判は小川正広、「古代ローマにおけるアエネアス伝説の意義（上）（下）」、『古代文化』31, 昭和54年, 1-13, および 71-90. 第四章参照のこと。

(6) ゼウスのプリアモス家に対する敵意は Strab., 13.1.52, Conon, 41 にも言及される。ただしこれらはホメロスに基づくものと考えられる。

(7) 岡道男、「ホメロスと叙事詩の環」、『京都大学文学部研究紀要』16, 昭和51年, 55-338, 202-203, 及び小川、上掲論文註4-3参照。

(8) イリウ・ペルシスのプロクロス梗概及び断片 I (T.W.Allen, Homeri opera V, Oxford 1912)。

(9) Dionysius of Halicarnassus, Roman Antiquities (以下 R.A.と略), 1.48.2.

(10) このレリーフは紀元前 6 世紀の詩人ステシコロスの作品『イリウ・ペルシス』をおもな題材としたとされる。cf. Galinsky, *op.cit.*, pl.86b.

(11) 「ヘスペリア」と「ラティウム」の関係については小川、上掲論文 5,76-77 参照。

(12) Dion.Hal., R.A. 1.72.2.

(13) 但し紀元前 4 世紀から 3 世紀の悲劇詩人リュコプロンの作『アレクサンドラ』ではアレクサンドラ(カッサンドラの別名)がトロイア戦争の始まる前にアエネアスのラティウム到着と未来のローマの栄光を予言したことになっている。しかしこの『アレクサンドラ』という作品は全篇カッサンドラの予言を見張りの召使が報告するという形式を取っており、また予言の内容は叙事詩の環の詩群の主題をほとんど全て網羅している。従ってアエネアスの運命とローマの未来だけをカッサンドラが予言しているわけではなく、むしろ予言は単に設定に過ぎないと考えられる。更にこのアエネアスとローマに関する部分(1226-1280)は悲劇詩人のリュコプロンの作ではなく、彼以後の同名のリュコプロンのものという説が有力である。cf.C.v.Holzinger, Lykophron Alexandra, Leipzig 1895(rep. Hildesheim 1973), 45, 51ff. 61ff., G.W.Mooney, The Alexandra of Lycophron, London 1921(rep. New York 1979), ad loc. また 1446-1453 も挿入の可能性が強い。

(14) アエネアスの裏切りの伝承に関しては特に M. Reinhold, The Unhero Aeneas, C&M 27, 1966, 195-207 を参照。

(15) Dion.Hal., R.A. 1.48.3 による。

(16) *Ibid.*, 1.48.3.

(17) Ibid., 1.47.

(18) Liuius, Ab Vrbe Condita, 1.1.

(19) Lycophronis Alexandra, Scholia Continens, recensuit E.Scheer, Berlin 1958, ad 1268.

(20) Seruius Auctus, ad 2.636. この他にアエネアスのpietasを伝えるものに偽クセノポン『狩について』、ソポクレス『ラオコオン』等がある。また考古学的証拠についてはW.Fuchs, Die Bildgeschichte der Flucht des Aeneas, ANRW 1.4, 615-632 (Taf.47-58)参照のこと。

(21) アエネアスの妻が同行しないという伝承はステシコロスに遡ると考えられる。しかしより古い伝承ではともにトロイアを去ったとされる。この伝承については岡、上掲論文 202, 及び R. G. Austin, P. Vergili Maronis Aeneidos Liber Secundus, Oxford 1964, ad 795を参照のこと。

(22) プリアムスの死とウェヌスの啓示の間にはいわゆる「ヘレネ・エピソード」がおかれているがこれは実は主な写本には存在しない。一応本論でも除外して考える。cf. Austin, op. cit., ad 567-588.

(23) Austin, ibid., introd. xiv及び本注(2)参照。

(24) この予兆と歴史的事実との関連については B. Grassmann-Fischer, Die Prodigien in Vergils Aeneis, Muenchen 1966, 9-28 参照のこと。

(25) Cf. H. Oppermann, Vergil, in : Wege zu Vergil, Darmstadt, 1963, 93-176 (= Vergil, Frankfurt 1938), 150.

(26) Buechner, op. cit., 336, 339, cf. P. Kragelund, Dream and Prediction in the Aeneid, Copenhagen 1976, 46.

(27) エトルリア人のリュディア起源についてはHerodotus i.94, Tac. A. iv. 55.但しDion. Hal., R. A. 1.27-30 はこの説に反論を加えている。なおエトルリア人のイタリア渡来はトロイア戦争以

後であるはずである。このアナクロニズムについては小川、上掲論文、註 1-8., J. Gage, *Les Etrusques dans l'Eneide*, *MEFR* 46, 1929, 115-144 参照。

(28) ローマにおけるトロイア伝説の受容の過程については小川、上掲論文第一章。及び同氏, 「*Archaeologia Vergiliana* アエネアス伝説と女神信仰」、『西洋古典論集』1980, 京都大学文学部西洋古典研究室, 41-66 参照のこと。

(29) このコリュトゥスという地名はヘスペリア、イタリア、アウソニアという漠然とイタリア半島を意味する単語と比べて明確な意義を持っていることが推測される。つまりこのように二つの地名が並置されている場合、『アエネイス』では一方は明確な意味を持つことが多いのである。例えば次の二つの例が挙げられる。

7.43 *Tyrrhenamque manum totamque sub arma coactam*
Hesperiam.

54 *multi illam magno e Latio totaque petebant*
Ausonia;

前者の例では「テュッレニアの」軍勢とは特にアエネアス側につくタルコン率いるエトルリア軍を示すと考えられる。後者のラウニニアの求婚者の例ではアウソニアの中で特に「ラティウムの」といわれるのはトゥルヌスを特定していると考えられる（他の例 4.236, 5.82, 7.601）。またこのコリュトゥスはトラシメヌス湖の北に位置するコルトナ(Cortona)と同一視されている。しかしカエレの北の都市、現在のタルキニアであるという説が近年提出された。N. Horsfall, *Corythus: The Return of Aeneas in Virgil and his Sources*, *JRS* 63, 1973, 68-79.

(30) ダルダヌスのエトルリア起源説はウェルギリウスの創作であるかどうかについては意見が分かれる。ギリシアの伝承ではダルダヌスはトロイア人であるという見方とギリシア人であるという伝承が並立していた。またギリシア人とする説の中にもアルカディア、

クレタ、サモトラケの各説がある。ローマにおいてもエンニウスはギリシア説をとり、ワッロもまたサモトラケ説 (Seruius, ad 1.378, 3.148) あるいはアルカディア説 (Seruius Auctus, ad 3.167) を、とっている可能性が大きい。ところがトレマはワッロをエトルリア説の首唱者とし (Thraemer, Dardanus, =RE 4, 2175)、ハインツェもこれに従う (Heinze, op.cit., 5. Anm. 1)。しかしブッフハイトは反論し、ウェルギリウスの提唱によるとしている (V. Buchheit, Vergil ueber die Sendung Roms, Heidelberg 1963, 164f.)。近年ではこの見解が受け入れられて来たようである (岡道男、「古代叙事詩の序歌－「アエネイス」について－」、『西洋古典学研究』26, 1978, 1-22, 注34参照)。更に近年テュニジア出土の碑文からもブッフハイト説を補強する説が出されている (J. Heurgon, Les Dardaniensen Afrique, REL 47, 1969, 284-294)。またエトルリアにおけるアエネアス伝説については Galinsky, op. cit. 第三章、小川上掲論文 (古代ローマにおけるアエネアス伝説の意義) 第四章参照のこと。

Legend and Prophecy in the Aeneid II and III

Satoshi IWAYA

Aeneas has been handed down by many different, or sometimes contradictory traditions.

He is as much respected by all the Trojans as Hector. Although he is a good warrior, Aphrodite and Poseidon come to his rescue in the actual battle scenes.

Poseidon prophesies that Aeneas will succeed to the throne of Priam, for Zeus hates the family of Priam. However, Achilles says that Aeneas himself wishes the throne.

The stories about the wanderings of Trojan people are also disputed. The Poseidon's prophecy suggests that Aeneas remained even after the fall of Troy. According to another version, he fled to Mt Ida before the fall of Troy. There are many differences among legends about the site of their settlement. Prominent on the list of sites are Hesperia and Latium. In this case, it is important to notice that Hesperia means no more than western land, and they didn't head straight for Italy from the beginning. They did not have enough ground for going to Italy, so their arrival is nothing but a chance occurrence.

The version of Aeneas' betrayal comes from his narrow escape from Troy. It suggests a secret treaty with Greek armies. On the contrary, there is a widespread tale about his 'pietas' on his escape. He chose Penates and his father Anchises when allowed to select his most important things.

This is the figure that Virgil adopts as his Roman epic

hero.

In molding the character of Aeneas, the poet selects among such varied traditions, or sometimes makes original tales. In the process of making the character, Virgil makes full use of the ambiguity of prophecies.

There exists a certain pattern in books II and III, namely prophecy - refusal - recognition. Virgil modifies the legends, or creates a new Aeneas in the course of refusal actions.

On the night that Troy fell, Hector appeared to Aeneas in a dream, and advised Aeneas to flee from Troy, entrusting the Penates to him. In spite of this advice, Aeneas rushed into the battle, thinking that dying in the battle is a beautiful thing. Depicting this heroic conduct against the prophecy, Virgil wiped out the suspicion of Aeneas' betrayal.

Creusa, who had been lost on the way of escape, appeared to Aeneas and prophesies that they should head for Lydius Thybris, the Etrurian river. This prophecy is again neglected. Trojan people began to wander to seek their new country.

They consulted the oracle of Apollo at Delos. It says that they must seek the 'mother land'. Anchises judges wrongly this oracle and orders to go to Crete, the homeland of Teucer. In Crete, Penates appear to Aeneas in a dream, and make a prophesy that their destination is the fatherland of Dardanus. It is Etruria by Virgil. Thus the prophecies of Creusa and Penates correspond to each other.

In this indirect way, Aeneas comes to recognize the reason of the Creusa's prophecy. Without this recognition Aeneas couldn't get over the crises in Carthago and Sicily. For the most perilous point common to these crises is that Aeneas could

settle in both countries. If he had not recognized the reason why they should go to Italy, he might have yielded to these temptations.

Their journey to Italy turns into the homecoming of Dardanus. This is the most outstanding modification of Aeneas' legend by Virgil. The Roman people must be pleased with the story, confirming their belief that they are the authentic Trojan descendants.